

翻訳

ヘンリエッテ・ローラント・ホルスト
＝ファン・デル・スカーク

『炎は燃え続ける』

内田 博*

解題

以下に翻訳するのは、オランダ・マルクス主義の代表者のひとりにして、詩人としても高名なヘンリエッテ・ローラント・ホルストの自伝“Het vuur brandde voort”である。初版は、1949年にアムステルダムで出版されたが、訳出にあたって底本としたのは、ローラント・ホルストの遺稿による増補第3版（1979年刊）である。本書を翻訳することにしたのは、19世紀の末から第2次大戦の時期におけるオランダの社会運動、芸術運動の歴史、およびその時代の女性知識人の生き方を理解するうえで、参考になると考えたからである。

今回翻訳するのは、第1章「1869～1896年」の第2節「寄宿女学校の頃」の後半と第3節「独身時代」の5分の1である。注は、すべて訳注である。

第1章 1869～1896年

第2節 寄宿女学校の頃（後半）

さて、いつも一緒にいてよく覚えている子の話をしよう。

同級生で私が親友になったのは、たったひとりであった。イニシャルでM.G.というその子は、フローニンゲンの出身であった。格別な才能があったわけではないが、健全な理性の持ち主で、親切であり、それが私を引きつけた。彼女は行いもよかった。彼女の周囲には、温かな家庭生活の雰囲気があった。彼女はロマンチックではなく、この点ではむしろ平凡であったが、私と同じく、オーステルウォルデの不毛で、居心地の悪い環境を堪え忍んでいた。寄宿女学校時代が終わった後、私たちは、何度もお互いの家に泊まりに行った。一度、彼女の両親がフローニンゲンの大市に一緒に行こうと招待してくれたこともあった。そのときに楽しいことが起こった。お互いにまったく自由に交際していた若者たちが、毎晩一緒に外出して八日たったとき、婚約が成立したのである。

クラス一の秀才M.P.についても、一言いっておこう。彼女は、途方もない学校秀才で、よく勉強し、几帳面さが自慢だった。彼女には十分な基礎知識があったし、私にはほとん

* 藤女子大学人間生活学科教授

どない学習の方法論があった。彼女の父親は、アムステルダムにおける指導的な自由主義者であったし、彼女自身は、母親のない子ども四人家族の長女だったので、早熟に育ったのである。のちに彼女は、激しい政治生活に入った。私たちは、友人になることはなかったが、仲間としてつきあった。お互いのあいだには、確かに嫉妬心があった。

C.d.V.v.S は、思い上がっていると受け取られかねない発言をしないよう私を注意してくれた子で、非常に潔癖かつ高貴で、誠実な人柄であり、その上、鋭い洞察力をもっていた。彼女は、フリースランドの貴族の家柄の出身で、その美しく丸みを帯びた整った容貌やすがすがしい顔色は、まるでフリースランド人らしくなかった。少女なのに眼鏡をかけ、ぼんやりしていることが多かったので、彼女は教授というあだ名で呼ばれた。彼女は読書家で、一本を呼んでいない姿を見たことがないほどであった - 英語とフランス語もうまかった。最初のうち、彼女は私より上級のクラスにいたが、そのクラスの他の子がえらそうなのにうんざりして、自分で望んで下のクラスに移ってきた。私たちのクラスでは、彼女は格別に優秀で、えらそうにするためでなくただそれが楽しいからという理由で、何にでも興味を示した。彼女はいたずら好きで、よく笑っていた。その後彼女は、ブリティッシュ・コロンビアに行ったが、オランダには何度も帰ってきていて、私が結婚したときには、式に出席してくれた。彼女はなお存命で、私とは定期的に手紙のやりとりをしている。また、お互いに本を贈りあってもいる。彼女は生涯に多くの傷を負ったが、それでも高潔な人物であった。

C.d.V.v.S をクラスから追いやったえらそうな生徒とは、エンスヘンデの大織物工場主の娘であった。彼女は非常に頭がよく、文才もあった。子ども新聞に短編が何編か掲載されたこともあった。それを知ったときの私の驚きといったらなかった。私よりたった一歳年上なだけの子が何度も新聞に載るなんて、すごく特別なことにちがいないと、思っていたからである。

さて、たいていの女生徒には「お姉様」がいた。ある者はコールズ先生に、ある者は Schw. 先生に夢中になった。私がオーステルウオルデで得たお姉様は、R.S. であった。そして、彼女の方もそうなることを許してくれた。彼女はスマートで、黒くカールした髪、大きくて黒い瞳、よく通る美しい声の持ち主で、話し方も動作も魅力的だった。彼女への求愛がうまくいった理由は、もはや完全には思い出せないが、ただ今でも覚えているのは、道を歩きながら彼女とキスしたことである。

私と彼女は、夏には、いつも一緒に、ローゼンダーの森でピクニックをした。そして、みんながよくするように、何ヶ月も歩いて旅行しようと約束もした。そこで私は、その森まで徒歩旅行をしようと R.S. を誘った。自分から誘うなんて、自分でもほとんど信じられないことであった。R.S. に対して、私の気持ちは、それほど昂ぶっていたのだ。私の性格からして、こんなことをしたのは、このときだけであった。私には、燃えさかる熱情を誰かに分け与える必要があったのだ。そして実際に、私は価値あるものに対する愛情を無駄にはしなかった。R.S. は、彼女を悩ませていた名誉欲を別にすれば、気高く、高貴な性格をしていた。彼女を好きになったことで、私は、反セム主義という危険な細菌に対する免疫を、当時もその後も変わらず得ることができた。反対に、私は生涯を通じて、親セム主義者となった。R.S. の妹もこの学校に通っていて、R.S. ほどではないが、かわいらしかった。

私のクラスでもっとも良い生徒だったのは、L.van R. と M.v.H. であった。ともに貴族の

家柄で、前者はユトレヒト、後者はヘルデルランドの出身だった。ふたりとも、非常に頭が良かったというわけではないが、行いに好感がもて、親切で率直であり、良い教育を受けていた。L.van R.の母は - 父親はすでに亡くなっていた - 周囲に掘割をめぐらした近くの邸宅に住んでいた。彼女は、校長先生や先生が連れてきた生徒たちと愛想よくつきあった。とくに、L.の同級生たちは、その他の学年の生徒よりも、よく一緒にL.の母の家にお邪魔した。

最後に、E.Z と B.Z.という姉妹について、少し話そう。ふたりとも、このうえなく魅力的な性格で、聡明で好奇心が強く、そのうえ情熱的であった。彼女たちの父親がポットギーター¹の親友だったので、ふたりとも、近代オランダ文学に関して、私よりはるかに詳しかった。アフリカ人とのハーフであるのに、彼女たちの肌はオリーブ色であった。姉のほうは穏やかで陽気であったが、妹は、感受性が強く、洗練されていて、活発で機敏だった。この妹のほうは、渡り鳥とあだ名されていたくらいで、教頭先生にとってはやっかいな生徒であった。校長先生は、彼女が我慢ならなかったらしく、理由があろうとなかろうと、彼女をひどく叱りつけていた。根拠もないのに B.Z.を叱りつけていたある日のこと、校長先生は、無作法な返礼を受けた。校長先生は、殴りかかる身振りをしながら、彼女にかけよった。生徒は青くなり、抑揚のない単調な声で、「先生、叩かないでください」といった。校長先生は、「悪い子ね、平手打ちにしてやる」とかんかんに怒って叫んだ。何秒間か重たい緊張が続いた。殴り合いになったのか？B.はたしかにぶたれたが、それ以上のことは起きなかった。「部屋に行って、三日間謹慎しなさい」と、すぐに命令が下った。B.は毅然とした態度で、教室を出て行った。私たちはみんな、彼女が道徳的に勝利した、と感じた。

私ものちに校長先生の癡癡の犠牲となったが、そのときにはこれほど断固とした態度はとれなかった。

冬に何回か催される、いわゆる「大いなる夕べ」のときのことであった。そのときには、校長先生は、さまざまな教科での私たちの品行や努力、成績の伸びを判定するための成績表を持ってくる。それから、賞賛と叱責が与えられる。そこで第一幕が終わる。

第二幕は、お茶とクッキーで始まる。その後、何人かの生徒が、歌とピアノの上達ぶりを試験され、詩を朗読させられる。こうした仕方で、大いなる夕べは、学校生活の単調さを打ち破り、その結果、この日が待ち遠しいという生徒の思いをかきたてることになった。たいていの生徒は朗読が嫌で、その順番が来ないようにおびえていた。R.S.や私のように喜んでやる子が、いつもかわるがわる朗読していた。ある大いなる夕べで、私は、校長先生が私をやりこめるつもりだとも知らずに、コールリッジの『老水夫の歌』を朗読することになった。この美しい詩を暗記するのに大変に苦労したので、私は、うまくできたことに少しばかり有頂天になり、朗読できることを喜んだ。私はまた、ショパンのワルツを暗譜で演奏することにもなっていた。

その大いなる夕べのとき、私たちはいつものように、食堂に座って、校長先生が来るのを待っていた。そのとき私は、食卓の椅子の並び方が悪いと思ったので、並べなおそうと

¹ ポットギーターはオランダの文筆家で、自由主義系の雑誌として有名な『道案内』の創刊者。のちに 80 年代の人々と呼ばれるグループが発行した『新道案内』は、この雑誌を継承し、乗り越えようとしたもの。

立ち上がった。ちょうど校長先生と教頭先生が入ってくるころだとは、気づかなかった。校長先生は、私が立っているのを一目見て、洪水のように非難の言葉を浴びせかけてきた。

「お前はいつもおせっかいだ。椅子をすぐにもとに戻しなさい。成績表を見せてやったろう。目立つように着飾ることだけは一人前だから、会話はよいが、それ以外の教科はどれも似たり寄ったり、算数、地理、オランダ語、全部だめだ。」私は、かろうじて答えた。

「では、もっとよい先生を手配するようがんばってください。そうすれば、私はがんばります。私はどの教科も好きです。」「夕方に孔雀のように羽を広げ、みんなを驚かそうというのだろう。だが、そうはさせないよ。すぐに寝室に行きなさい。三日間の謹慎です。」

謹慎が意味するのは、食堂に行ってはならず、ひとりで食事しなければならないということで、本当は嫌なことではなかった。これが罰の第一幕だったが、私は気持ちが強かったのも、こう答えずにはいらなかった。「あなたの相手にならないよう、食堂を出て行きます。でも、あなたが私にしたことは、まったく不当です。「椅子をもとに戻しなさい」とあなたが冷静に言えば、それで済んだのです。もうお話になりません。ピアノも弾きませんし、朗読もしません。C.先生が私に「老水夫」を暗唱しますかと聞いてくれたので、喜んでやっただけです。」

こうはいったものの、私は元気なところか、完全に打ちのめされていた。すすり泣きながら食堂を出て、階段を上り、ベッドに倒れこんだ。そこで長い間、泣き続けた。全く無実なのに罰を受けたことを悲しんだからではなくて、反乱が無力であるという、子供だけでなく大人でも感じるもっとも苦い感情から泣き続けたのである。その夜のうちに、教頭先生が私のところに来てくれた。もちろん彼女は、校長先生が悪いとは思っていない。起きてしまったことには何もいわず、私のほうに身をかがめるようにしてお休みのキスをし、こういった。「ゆっくりお眠りなさい。もっとひどいこともあるのよ。」そこで私は、教頭先生に同情されているのに気づいた。

こういったシーンに続くのは、普通であれば、こうである。罰の三日間が終わったその日の朝、犯罪者は、朝食後に、校長先生の部屋のドアをノックし、「どうぞ」という声が聞こえるのを待つ。それから罪人は部屋に入って、「どうもすみません。私・・・」と謝る。ひょっとすると、そのとき校長先生は、「そんなに謝らなくてもいいわ。そんなに悪いことはしていないんですもの」というかもしれない。それから校長先生は、少しの間無愛想なポーズをとり、罪人のほうに向かってくる。それから場合によっては、罪人は、カノッサへの屈辱の旅をもう一度行う羽目になる。私の場合も、こうした普通の流れになった。罪に対するお説教が終わったところで、再び恩寵が下された。

こうした儀式の全体が、偽りの懺悔という吐き気を催すような喜劇であり、こうした喜劇を演じることが、これからはうまくやれるということを約束してくれるのであった。すべてが水に流されて、やれやれ、ということである。

大いなる夕べで爆発してから、校長先生は、ほとんど私の邪魔をしなくなった。彼女は、私を十分にけなしたと考えたようであった。夏休みが終わって、最上級学年に進級したとき、クラスメートと同様に、さまざまな特権を得た。たとえば、二人部屋である。私たち最上級生は、週に一度、校長先生のところでお茶を飲み、当時の最良のドイツ小説と一緒に読んだ。

オーステルウオルデで過ごした三年間で、私は、疑問を持たずに環境に順応する術を

学んだ。この点では、両親が私を寄宿女学校に入れた目的は達成された。また、私は、私の人生を豊かにしてくれた何人かの友人を、ここで得た。しかし、その三年間を極めて実り豊かに過ごしたとは、決していえない。精神面、宗教面だけでなく、とりわけ知性の面でそうであった。

私の内面生活は色あせた。激しい炎は、子供のころの私をもっとも幸せにしてくれた高みへの燃えるような衝動は、同級生たちの誤信や嘲りの前では居場所がなく、眠り込んでしまった。それが目覚めたのは、何年もたってからのことであった。

内面生活に集中するのは、いつも他人と一緒にいるようなところではほとんど不可能である。修道院のような宗教共同体においても、修道士や修道女は自分ひとりの小部屋で眠り、教会で規則正しく共同で祈るにしても、ひとりで祈ることもできるのである。

さらに、最終学年の生徒たちの水準は、合格点に達しないものだった。R. S.、C. d. V. v. S や Z. 姉妹のような多様な優等生が学校を去って、その代わりに入ってきたのは、教育もしつけも行き届いていない境遇の出身者であった。

宗教教育の点では、私たちは、完全に放置されていたのも同然であった。毎朝、始業時間の前に、校長先生が大教室で教訓的な本の一章を読み上げ、その後、私たちがひざまずいて父なる神に祈った。マルコという大きな犬が、よく校長先生についてきたが、ひざまずいている少女たちにはその犬が面白く、犬が周りをくくんくするのが愉快であった。もちろん、私たちは笑うのを我慢し、犬を遠ざけようとはした。また、何回か、教会にもでかけた。

知的、社会倫理的観点では、オーステルウオルデの教育は、欠点が多かった。授業に関する私の話からも分かるように、私たちが自分自身をさらに陶冶していくための重要な基礎など、オーステルウオルデではどうでもよかった。優秀な生徒は、フランス語、ドイツ語、英語の会話に熟達したが、ただそれだけであった。抽象的に思考することを学ぶための数学は、哲学と同様に、オーステルウオルデでは教えられなかった。自然科学に関しては、アルネムでの講演が自然科学とはほとんど無関係であったことは、すでに明らかにしたとおりである。動物学はまったく教わらなかった。植物学は校長先生が授業したが、そのときには、私たちは植物の茎が野生の花を散歩しながら取ってこなければならず、校長先生は分厚い本を開きながら、それがどの種や属に属するのかを講義した。植物の生活や植物界の発展については、何も教わらなかった。星界の驚異についても、若者の感受性を宇宙に対する畏敬の念や驚きで満たすことには成功していなかった。

オーステルウオルデの創設者が著名な自由主義経済学者であり、学校では毎年何回か、私たちの「成長」を自分たちに納得させるために、創設者の妻を訪ねていたにもかかわらず、経済学の授業はなかった。できる人が誰もいなかったのである。

ドイツ史は、校長先生に教わった。当時の私は、ドイツの皇帝の名前を順番に言うことができ、とくにフリードリヒ・バルバロッサに関心があった。しかし、聖書による歴史、ギリシャ史、ローマ史は教わらなかったし、エジプト文明、インダス文明、中国文明についても何も教わらなかった。もちろん私たちは、こうした歴史や文明のすべてを一般的な概略以上に理解することはできなかったろうが、それでも、とりわけ、狩猟民、漁労民、農耕民の魅力ある歴史が取り上げられて、農耕の発達に果たした女性の特別の

意義が教えられていれば、一定の思考モデルを作り上げることはできたはずである。

化学についてはまだ述べていないが、それは、それが他の科学に比べて意味がないからではない。逆である。少なくとも有機化学に関する知識がなければ、生きた自然を理解することは不可能である。

女子教育が改善され、中等学校(Hogere Burgerschool)や高等小学校(MULO)の生徒も、十分に自己陶冶できるほど有機化学を学べたならば、本当に良かったと思う。個人的に言えば、骨の折れる自学自習の果てに有機化学はほんのわずかしなものにならなかった。多くのプロレタリアートと同じく、1892年に以後の私は、独学者であった。

1885年から1895年の時期は、ネーデルランドの社会史における変動期であった。ドーマラ・ニーウェンハイスの説教によって、少なくともアムステルダムとフリースランドのプロレタリアートは、ぼんやりとしたアパシーから目覚めた。そして、みんなに愛された、この尊敬すべき指導者が、国王ウィルヘルム三世に対する不敬な発言によって、禁固一年の判決を受けたとき、大衆の怒りは限界を超えた。

フリースランドにおける長期の経済的危機が、農業不況によってさらに深刻化されたかたちで、プロレタリアートを苦しめていたのである。フリースランドではデモ隊が投石を行い、あちらこちらで騒動が起こった。この時期こそ、ブルジョアジーの優越的な立場や、労働者階級が被っているひどい不正義や労働者階級の窮乏を、青年が認識するチャンスであった。青年の理想主義、ひとを助けたいといった意志や、ひとの役に立ちたいといった衝動は、長いあいだ眠り込んでいたが、いまや堂々と表に現れた。青年たちは、くだらない戯言にうつつを抜かず代わりに、時代の大きな潮流をなほどこか把握することができた。そして、成人したあかつきには、労働者階級が国家と社会の権力をうまく行使して、社会を社会主義の方向で運営することができるように、労働者階級を自立的に思考し、意識し、意欲できるよう陶冶する役に立つことができるはずだと、考えていた。しかし、私たちには、社会の出来事を客観的に説明するものが少しも与えられなかった。与えられないまま、私は女学校を去った。だから私は、時代の動きに全くと言って良いほど疎かった。

1888年の初夏に、私は、なんの後悔もせずに、オーステルウオルデを去って、二度と戻らなかった。

上層ブルジョアジーの裕福な階層では、成人した娘が女学校から実家に戻ってきたあとも、両親がその娘を半年かそれ以上の期間、外国に遊学させることが珍しくなかった。母は、レイデンの教授の娘が、前の年の冬にライクのある家庭に滞在していたのを、聞いていた。この情報は都合が良かったので、母は、この娘をコーヒーに誘い、滞在した家庭についてあれこれ話を聞いた。その話を受けて、母は、私が10月から6～7ヶ月のあいだT.夫人のところに滞在できないか、とライクに手紙を書いた。冬を前にして、音楽をたくさん聴ける外国の大都市に行けるかもしれないというのは、私の気に入った。私は、ライクまで付き添ってくれた父に、一番良い声で、お別れの挨拶をした。

T.夫人の家族は、母とふたりの娘からなっていた。T.夫人は高齢で、スイスの出身であった。彼女は、声が柔らかくすぐに涙を浮かべる、親切で世話好きなおばあさんとして、私の記憶に生き続けている。年上の娘のイエニーは、卵形の美しい顔と見事に豊かな黒髪の持ち主で、二本に編んだ髪を頭の上でまとめていた。年下のアデーレは金髪で、

活発で機知に富み、姉よりも飾り気のない性格であった。

ふたりとも私よりかなり年上であったのに、すぐに、自分たちをファーストネームで呼ぶようにいってくれた。アデーレとは、すぐに友人になった。私の他に、ひどいフランス語を話すドイツ人の娘もいた。しかし、彼女はホームシックにかかり、すぐに実家に戻ってしまった。

一家の住んでいる家は三階建てで、堤防のふちにあり、そこをマース川が流れていた。三階にある私の部屋からは、川とその向こう側にある丘がきれいに見渡せた。

カーペットと家具には、はっきりとすり切れた跡が残っていて、私はびっくりした。全体の印象は、「シャビー・ジェンティール」と言われるようなもので、それは、以前は裕福な暮らしをしていて、没落を隠そうとしている人間の生活様式のことである。

しかし、T. 家の場合には、これはどうでもよいことであった。友人たちも、一家が貧しくなり、二人の娘が時には夜中まで一生懸命働いているのを知っていた。彼女たちは、フランス語、ドイツ語、英語を、イエニーはその他に数学を、アデーレは音楽を教えて、生計を立てていた。

私も彼女たちから教わった。様々な言語で作文も書かねばならず、そのときには彼女たちは、文体について高い水準を要求した。その他に、私は絵画の授業を受け、音楽院の教師からピアノと声楽の授業を受けたので、毎日が忙しかった。

私がいらいらしたのは、彼女たちが、私を信じて行動させてくれなかったことであった。例外は、すぐ近くのポストまで手紙を出しに行くことぐらいであった。私は、13歳の子どものときには、ひとりでレイデンの歯医者まで通っていたので、監禁されているような生活は、落ち着かなかった。しかし、今はそんなことはないが、当時のカトリックの国では、未婚女性がひとりで外出するといった行為は、不適切なことと考えられていたのである。

アデーレは、二度、父方の名門にT. 技師がいることをほのめかしたことがある。ある晩、私の部屋でふたりでおしゃべりしていたとき、アデーレは、自分たち姉妹の人生を左右した秘密を震える声で話してくれた。

彼女の父親は、小さいとはいえドイツのある侯爵の非嫡出子であった。私は、アデーレの父親が若いころにドイツにいたとは知らなかったが、彼は、子ども時代を侯爵家の宮殿で暮らしていたのだ。侯爵は、この息子を嫡男とするつもりであったが、突然亡くなってしまったのだという。アデーレは、彼女の祖父である侯爵から譲られて家族が大事にしてきた銀食器なども見せてくれた。

この頃もロマンチックなことが好きだったので、この出来事にはおおいに興味をそそられたが、その深い印象については語ることはできなかった。それよりも、アデーレのように知性と教養のある女性が、父の運命が自分の生涯に大きな影響を与えたと信じ込むほどに、自分の出自に大いにこだわっていることが、私には少しばかりおかしかった。彼女の父親は鉾山技師として有益で名誉ある仕事をなしとげたのであり、その父親が誰かということは、それとはいかなる関係もないのである。しかし私は、こうした思いを口には出さず、ひとりで「判った。イエニーとアデーレはふたりとも、何か口実が欲しいのだ。」と考えることにした。

私の両親は、私が冬のあいだ、ライクで音楽を聴いたり劇場に通ったりと、ノールド

ウェイクではできなかったことに時間を使うだろうともくろんでいた。アデーレーイエニーは音楽がさほど好きではなかった—とは、音楽院のコンサートや、素晴らしいオペラの公演にでかけた。ライクにはよい一座があり、私たちは、月に何度も劇場に通った。そのおかげで、私は、『ユグノー教徒』、『リゴレット』、『アイーダ』、『ハムレット』、『ファウスト』など、マイアベアー、ヴェルディ、ロッシーニ、グノーの作品に親しむことができた。

オペラというジャンルには、刺激的な要素が内在しており、それはロマン派の作品にあっては、多くの場合事件の形をとる。なかでももっとも感動したオペラは、ベートーベンの『フィデリオ』であった。さて、古いロマン派の感動を再び呼び覚ますには、少しばかりのきっかけが必要である。こうしたきっかけが、私にも与えられた。アデーレである。彼女が、一座のバリトン歌手に、アントウェルペンの市民家庭出身の洗練されたこの青年に感激したことを私に率直に打ち明けてくれたのが、それである。この青年は、まだ音楽院で声楽を学んでおり、その教師に私もレッスンを受けていたので、私たちは、自分の芸術をつかみ取ろうとする彼の勤勉さや熱心さを、いつも話題にしていた。

アデーレは、待ちかまえていたように、私を自分のまったく無垢な熱狂の仲間に入れたのであるが、彼女は私の熱中癖をおぼろげにしか理解していなかった。彼女は、私が関わった他のひとにも多かれ少なかれ同じことをしたが、私についていえば、彼女が私の行く手を邪魔しようとしても、その頃には、それは暴れ馬をおとなしくさせるのと同じほど、難しいことになっていたのである。その冬は、私には、C.氏が主役を演じるオペラの鑑賞しかなかった。食欲がなく、よく眠れなくなり、体が弱って、何日か具合が悪くなってそれが直ったと思ったら、椅子のうえで意識を失い、床に倒れた。

もちろん、私は、若い歌手とその役柄とを、なによりもハムレットやリゴレットと同一視していた。自分の力を超えた責務に直面したデンマークの王子の深い心が、娘を失った哀れな愚か者の悲劇的な苦悩が、私の空想を大いに刺激したのである。

もちろん、私を見たときの両親は、私の体の状態に満足する訳がなかった。「パパも私も、あなたは凝りすぎて病気になったのだと思う。だから、ライクには戻しません。」と母はいい、「あのご婦人はあなたにあまり合わなかったようで、ひどく怒っています。」と続けた。

母の心配は、不要だった。T.家とお別れした後、私たちは一週間ほど、両親が時々滞在していたブリュッセルに行った。初めて見たこの首都は、絵のように美しく、モンターニュ通の丘を登れば、ブル通や感動的なサン・ミッシェル・エ・ギュデュル大聖堂も近い。洗練された商店の豪華なショーウィンドウや、上品なレストランの見事な盛りつけの食事など、こうしたことのすべてが私の気分転換になった。ブリュッセルを満喫したおかげで、健康も目に見えて回復した。視野狭窄と凝りすぎの状態から開放されて、私は年齢にふさわしい普通の活気を取り戻した。私が若い歌手に夢中になったということには、もちろん性的な要素もあったのだが、それは現実の歌手とは少しも関係がなかったので、尾を引くこともなかった。

第3節 独身時代

実家に帰ると驚きが待っていた。両親は、きれいで大きな庭がよく見える、ゆったりとした日当たりのよい部屋を用意してくれていた。壁紙は明るい色で、家具はシンプルだが美しく、壁に掛けられた絵画の趣味もよくて、私はすっかり有頂天になった。テーブルの上には、香りのよい紅白のバラの花束も置いてあった。

この部屋で私は、生涯でもっともひどいことをひとつ、もっとも楽しいことをふたつ体験した。ひどい経験というのは、かわいそうに父と妹がレイデンのガルヘヴァーテルで溺死したという話を、私が母と一緒にこの部屋で聞いたということである。

楽しい経験とは、まず、この部屋でヘルマン・ホルテルと知り合いになり、この部屋でホルテルが詩とスピノザの哲学について、詩と哲学の統一を私が理解できるように語ってくれたことである。こんな話は、誰も私にしてくれたことはなかった。もうひとつは、将来の私の夫が、彼の父親の死について語ったときである。そのときの眼差しとお互いの身振りだけで、私たちは生涯一緒だと感じるのに十分であった。

私は、この原稿を、昼間に小一時間ほど休憩するのに使うソファを見ながら書いているが、私が若い頃には、このソファには来客が座り、私はその向かい側で、まっすぐな背もたれのついた安っぽい肘かけ椅子に座っていた。「女性の部屋に向いた椅子がないわけではないのに」、とは女性の友人の感想である。確かにそうだが、この椅子は私の生涯にわたって役に立ってくれ、今でも、私が冬を過ごすアムステルダム²の保養所「日時計荘」の私の部屋に置いてある。

家に戻って何日かたったころ、毎年恒例になっている学生ボート連盟のボート・レースがおこなわれた。これは、大学外でも関心の的となっている催しであった。私の兄は、自分ではボートを漕がないが、レースを見に行こうと計画した。兄は、学生組合のメンバーとして、レースに出場するために、大勢の若い男女が乗り組んでカークに向かうニョルド²の船に、若い女性を一名招待する権利を持っていたのである。カークでは、一日中、野原でピクニックをしていてもよいという。二三人の教授夫人が付き添いとして世話をやいてくれることもあったという。兄と一緒にいくかといったとき、私はもちろんすごく喜んだ。私はレースの一日前に、ティーレ教授夫人ともうひとりの夫人のところを訪ねねばならなかった。ふたりは、翌朝の9時から10時のあいだには、ボートのある場所に來ることになった。

大学ボート・レースの日は、ひどい雨降りになることが多いのだが、この年は晴れだった。温かい陽光のなかを、帆をぴんと張って水面を滑るように走るのは、すごく気持ちがよかった。岸辺を見れば、雌牛が牧草地で草をはみ、またのんびりと反芻し、空には銀の縁取りをした積雲が夢見心地に地平線のかなたに通り過ぎてゆく。

私は、大学対抗ボート・レースが観客に引きおこす興奮がどんなものか、まったく想像もしていなかった。確かなのは、それが伝染するということである。何千人もが「ニョルド、ニョルド、がんばれニョルド」と声を限りに叫ぶのを聞いているうちに、我知らず一緒になって大声で叫んでいるものなのである。

² ニョルドは、レイデンの学生組合の下部組織として、1874年に創立された最初の学生ボート連盟である。

大声援が選手を駆り立て、全力でオールを漕ぐよう励ますのである。ニョルドは、カーブでラストスパートをかけてネレウス³に追いつき、半艇身差で勝った。歓声がやむことなく続き、そのなかを、疲れ切った汗だくの選手たちが、勝ち誇って肩を組みながら、更衣室のある建物に消えていった。

食事の時間には、勝者の側にシャンパンのグラスがたくさん用意された。すべてが片付いたときには、もう帰りの船の時間だった。

私は、こんなに多くの青年たちと一日中一緒にいたことはなかったので、精一杯努力しておしゃべりし、彼らに関心のありそうな話題を選んで話をした。にぎやかな会話、興奮、シャンパン、そして一日中日にあたっていたせいで、私も他の娘も眠たくなってきた。会話もしだいに静かになった。夜には牧草地の方から冷たい霧が降りてきた頃には、私たちは震えながらコートやショールにくるまって、温かいベッドを恋しがるようにになっていた。

さて、そこで起こったことは？暗闇のなかで、航海士が航路を見失い、レイデンに戻る代わりに、アムステルダムに行く環状水路に入ってしまったのだ。航海士は、国民産業パレス⁴のあたりから夜空に放射される明かりが見えるまで、間違いに気づかなかった。船がレイデンに航路を定めたのはほぼ真夜中で、私たちが到着するのは早くても午前3時半であった。

家族がこの船に乗りあわせている家庭では、みんなが、ひどく不安になっていた。何が起きたのか判らなかったので、深刻な事故を心配したりもしていた。夜明けのかすかな光のなかに、とうとう船が現れたとき、やっと安堵の気持ちが広がった。

私の父は、午後9時には馬車でレイデンに着き、そのままおじのところで待機していたので、非常に不安だったようだ。その反動はすぐに訪れ、父は家に帰る途中、私には何の責任もないこの事件のことで、私をひどく叱りつけた。「おまえを大学生と外出させるのは、これが最後だ」と、父は決めた。家に帰ると、私は朝遅くまで眠り込んだ。帽子もかぶらずベールもつけずに日差しの下にいたので、顔は火のように日焼けし、肌はビーフステーキのような色になった。日焼けしたところをバターミルクで湿らすのが、せいぜいだった。とはいえ、楽しい一日であった。

さて、詩作への衝動が現れてくるまでに実家で過ごした年月について、何をいうべきなのだろうか？この衝動は、長い間弱々しく休止していて、灼熱の溶岩流のように、突然勢いよく姿を現したのだろうか？そうではなくて、神に贈られた時と力を、私がつまらないことに浪費していたのだろうか？現在では、裕福な両親の娘は進学して、どの分野で卒業証書を手にするのかを、見習い看護婦になるのか、勉学を続けるのかななどを、自然に理解する。しかし60年前には、当たり前だが、娘は結婚するまで両親の家において、ピアノを弾いたりスケッチをしたり、読書をしたり「デザート」を作ったりして、時に

³ ネレウスは、アムステルダムの学生ボート連盟で、1885年に創立された。

⁴ 国民産業パレスと訳したのは、Paleis voor Volksvlijtである。1864年に完成し、1929年に焼失したこの施設は、社会事業家としても有名なサミュエル・サルファチの構想によるもので、産業振興に役立つ常設の展示会場として企画されたものであった。しかし、その後は、芸術等に関わる催し物の会場としても利用されるに至った。この点では、産業パレスという訳語は適切ではないが、所期の構想にしたがってこう訳すことにした。

は訪問したり訪問されたりなど似たような大きなことをして、時間を過ごすのである。多くの娘には、舞踏会や晩餐会に行くことがあり、これを略して「お出かけ」といった。つねに分別を失わない母は、「お出かけしないのと誰かに訊かれたら、両親が田舎に住んでいるので、機会がないと答えなさい」と、私にいていた。それで話はすむので、私もこれが一番だと思った。

ハーレルムでは、父方のではないお婆のところ、二度、舞踏会に誘われた。お婆は、夫と成人した三人の娘と一緒に、ニーウェ・グラッハットの立派な家に住んでいた。ヴァン・デル・フーヴェンおじさんのところで偶然に出会ったP. エットホーフとは、いまでも友達である。彼女の両親のところでは、たくさんの音楽が演奏され、いつも愉快で楽しかった。彼女は、いわゆる第一階層には属していなかったが、それは女性には関係のないことである。「第二階級にいるから、第二階級にいるのだ」と、彼女は冗談でいていた。

それからレイデンでは、時々、ヴァン・デル・フーヴェンおじさんや他の教授の家庭の晩餐に出かけた。レイデンでのお出かけは、質素だった。たいていの教授は裕福ではなく、なかには大家族を抱えている者もいたからである。たいていは知的な学生と一緒に呼ばれていたもので、普通の晩餐でよくあるような浮ついた会話はなかった。

私は14日おきに、ピアノのレッスンを受けるためにハーレルムに通い、2時間練習をして気持ちよく過ごした。ハーレルムに通う日は、かなり退屈な日々が続くなかでよい気晴らしになった。レッスンが終わると、私は決まってニーウェ・グラッハトに行き、次女とは友達になったので、二階の彼女の部屋でおしゃべりをして過ごした。当時は、イプセンの人生観が、知的な若者たちに大きな影響を及ぼし始めた時期であった。「女性には自分の生を生きる権利がある、女性は男性的規範から自立しなければならない」—こうした新しい思想が、当時の若い女性たちに生氣を与えた。しかし、女性是他者のために生きるべきだという古い教説もなお清算されてはいなかった。二番目に年上のいところで気高いジュノーなどは、「あなたは、どのくらいついていけるの?」と訊かれて、L. S. 伯爵夫人の市民的優柔不断さを説教しながら、「誰もが自分らしく生きればいいの。それが一番。」と断言していた。

一番年上のいところであるスージーとアードほど才能に恵まれて魅力的な女性、私の周りにはいなかった。ふたりとも、よく私の家に泊まりに来た。スージーは、見事にカールした黒髪の持ち主で、言葉は鋭いが快活で、機知に富んでいた。彼女の黒い生き生きとした目には、からかいの光が浮かぶこともあるが、魅力的に笑うこともできた。彼女は音楽の才能に恵まれていて、聞いたことのある曲ならどれでも流れるように弾くことができた。私の母と一緒にルビンスティン⁵をデュエットし、父とはアンゴー夫人から歌曲を歌い、私とは、ピアノ二重奏曲を演奏できたほどである。彼女が泊まりに来たときはいつも、リンデンホーフの市民集会のように、我が家の雰囲気は盛り上がった。彼女は、海岸でバムボートや灯台をスケッチしたり、妹の前で、器用な手つきで手品をし、包みのなかから、かわいい小さなドレスを出したりもした。曇りなき太陽の輝きのような、うら

⁵ ルビンスティンは、1829年生まれ、ロシアの作曲家、ピアニストで、サンクト・ペテルブルク音楽院の創設者。

やむべき性格の持ち主であった。彼女は、子どもをひとり抱えた若干年上の技師と同居しており、彼にも、輝く太陽の分け前を与えていた。

アーダについては、一冊の本が書けるほどである。45年たっても、彼女のことははっきりと思い浮かべることができる。先述のジュノーが彼女のことで、その気高さ、堂々とした物腰が、ゼウスの妻もかくやと思わせたからである。しかし、その立派な、均整のとれたギリシャ的な鼻、丸く広い額、波打つようなダークブロンドの髪は、ミロのヴィーナスにも似ていた。彼女は、高貴な家柄の出身ではあるが、率直な人柄で、並外れた美貌や素晴らしい音楽的才能を鼻にかけることはなかった。メスヘールト⁶もレントゲン⁷も、彼女をもっとも優秀な弟子のひとりと考え、音楽に専念するよう勧めた。しかし、私がその勧めに従うよう迫ったときに、彼女は陰気な声で、「でも年をとりすぎているわ」と答えた。あの力強いソプラノで、彼女は歌手としても成功したに違いないと思う。演奏スタイルも、卓越していた。しかし彼女には、両親の一族に逆らってこの世界の境界を打ち破り、芸術家の宿命である避けがたい苦悩と挫折に立ち向かう勇気が欠けていたのだと思う。彼女は贅沢でなく、服装は質素で、パンと果物とワインを特に好んだ。周囲の者たちから抜け出すちょっとした勇気、ちょっとした力があれば、彼女は、その才能によって多くの人々に賞賛され、高く評価されたに違いなかった。彼女は、親類の男と、誰が見ても彼女にはそぐわない男と結婚した。この男は、アメリカ合衆国の辺鄙な土地で果樹園を始めた。彼女の両親は、彼女がそんなところに行くのを嫌がったが、彼女自身は、自然のなかでの自由な生活とそこで子どもを得ることを楽しみにしていた。彼女には強い母性本能があったのである。だが、最初の出産では世話がいきとどかず、彼女は産褥熱にかかった。一週間のあいだ、彼女は死と闘い、安らかに死んだ。友人のひとりが彼女の手相を見たら、生命線が短かったそうである。しかしながら、たしかにその弱さに脅かされていたとはいえ、彼女は、元気になることを望み、最後まで希望を捨てなかったのである。

アーダ以外で躊躇なく頭に浮かぶのは、レイデンの知識人社会出身のふたりの女性である。当時、ふたりとも仕事を得る必要に迫られていた。父親は有名な医者で盛んに医療もおこなっていたのに、その父親が、何日か病気にかかったと思ったら、慎ましい遺産も残さず、死んでしまったのである。姉は、一定の文学的才能があったが、フランス語の学習をすぐに放り投げて、人づてに仕事を探し、すぐに、女子中等学校の教員になり、生徒に慕われるようになった。

妹と同じく、姉のリーゼ v. K. も、女性にしては珍しく長く専門的な教育を受けており、びっくりするほど白い顔に巻き付くように、髪を重そうな二本のおさげにしていた。彼女は、快活で批判的だが、悪口は好きでなく、職業だけでなく動物や植物にも大きな関心を示していた。しだいに結核に冒されるようになって、彼女は、無理してでもできるだけ穏やかに暮らそうと考え、休暇もきちんととった。大きな休暇があるときには、彼女は、スイスに出かけたりもした。彼女には文学の才能もあり、その筆からいくつかの美しい詩を生み出した。

⁶ メスヘールトは、1857年生まれのアランダのバリトン歌手で、声楽指導者としても有名であった。

⁷ レントゲンは、ドイツに生まれアランダで活躍した作曲家、音楽教師で1855年生まれ。メスヘールトの友人。

妹のアンナ v. K. は、子どもたち、とくに聾の子どもたちにピアノと音楽を教えていた。これは、当時は、めったにないことであった。彼女の一生を通じて、喉にハンディのある何百人もの牧師、宣教師、教師たちが、彼女のところに来て、うまく話せるよう学んでいた。

姉と同じく、彼女も早くから進路を少し変えた。二人とも、心が、少なくとも年齢の割には、心が弱かったのである。

アンナは、陽気だが、物静かな性格で、忍耐強い教師であった。生徒たちはみんな、彼女が大好きであった。

レイデンの知識人社会では、裕福な親族に助けを請うのではなくて、母親も自分たちも職業労働によって自分たちにふさわしい生活を手に入れようとするこの姉妹の強さが、驚きをもって迎えられた。私の母は、働く女性の登場をいつも大いに歓迎していたので、アンナ v. K. がレイデン以外でも授業をおこなう気があると聞いたとき、できるだけ彼女を支援する決心をした。母は、週に一度、声のかわいらしい私の妹にピアノと歌のレッスンをしてくれるよう、アンナに頼んだ。ライクから帰ってきた後に、私もアンナから発声と和声のレッスンを受けた。

さて、村に新しい村長がやってきた。村長夫妻の子どもたちはまだ小さかったので、母は、娘たちにアンナ v. K. のレッスンを受けさせてはどうかといった。その結果は、いわずもがな。アンナは、こうして三人の生徒を世話した母に心から感謝することになった。そのうちに、母とアンナ、アンナと私のあいだに友情が生まれた。それは、彼女の死まで続いた。

新しい村長夫妻は、正統派⁸であった。村長は上品ぶった顔をしていて、私の父などは、彼が信条として酒を飲まず、他人の悪口もいわず、たばこも吸わないのを、鼻持ちならないと考えていた。しかし、村長夫人は、親切で快活なひとで、多くの村人とつきあおうと努力し、できるだけ村人の役に立とうと試みていた。ある日、彼女は、週に二回一時間ほど、彼女が設立した裁縫学校で授業しないかといってきた。私は「はい」と返事をしたが、すごくうれしかったという訳ではなかった。そこは、体を清潔に洗っていないために生じる酸っぱいような悪臭がいつもしていたし、村の娘たちとは、ほとんどつきあいがなかったからである。

独身時代の私の生活は、安楽ではあったが、かなり退屈なもので、それを何回か打破してくれたのが旅行であり、それを私は大いに楽しんだ。祖母と、ファン・デル・フーヴェンおじさんのところの二番目のいとこと一緒に、ちょうどいこがギムナジウムの最終試験を終えたときに、ベルギーに旅行したことがある。これはおばあさんの招待で、おばあさんは、自分が子どもの頃両親が住んでいた場所に行ってみたかったのである。

私たちは、アントウェルペンとメッヘレンを経てアルデンヌに行き、ロシュフォールを訪れて、そこからアンの洞窟に行った。生き生きと覚えているのは、たくさんの旅行者たちと乗り込んだ大きな乗合馬車である。そこで、団体を案内して回るガイドにあった。ガイドに従って、たいまつの手明かりを頼りに暗い洞窟のなかを進んでいくと、不思議な光景が目に入った。そこは天井の高いホールになっていて、その天井から、何世紀も何世紀も

⁸ オランダでは、正統派とはカトリックではなくて、カルヴァン派のことである。

水滴がしたって、下の方に伸びる大きな鍾乳石を作り上げていた。私たちは、洞窟のなかをどんどん深く奥に進んでいった。幻想的に光るたいまつの中明かりのなかに、不規則な私たちの岩壁が見え、そこに壁龕があった。ついに私たちは、地底に到着したのだ。しかし、ちょっと眺めたと思ったら、山の反対側から洞窟の外に出るために、狭くて長い通路を進まねばならなかった。この旅行全体に強い印象を受けたが、もっとも心に残っているのは、最初のたいまつの中明かりである。それを予期せずに外光の下から洞窟に入ったので、たいまつの中明かりは、しだいに行程の終わりにかけて輝きを増したように思えた。これは風変わりな感動であった。

おそらく、洞窟全体には、現在では電気の照明がなされているだろうが、それでは、訪れた者たちが、幻想的な明かりのショーを味わうことはないだろう。

第二の旅行は、一年後のライン行きで、母と妹が一緒だった。ボンでベートーベンの生家を見物してから、ジーベンゲビルゲの古城や遺跡を訪れ、さらにレマゲンまでラインを遡った。ラインの船旅自体も、非常に魅力的でロマンチックだった。昔の伝説やバラードが頭に浮かんだ。切り立った岩の上でローレライが誘うように歌を歌い、灰緑色の水の底では、水の精がダンスを踊り、矢のように早く川面に姿を現したかと思うと、素早く水の中に潜ったりを繰り返す。

今日では、古くからある「父なるライン」の詩はもうすたれたのだろうか？あるいは、父なるラインの泉が、悲惨さや苦悩や憎悪を背負っているのだろうか？

レマゲンからはアールタルを通過して、馬車で旅行した。最初は、道が広くて気持ちよく、周囲の丘にはブドウ畑が広がっていた。しかし、道はしだいに狭くなり、丘も高く険しくなり、アルテナールのあたりでは、谷間の道は薄暗い裂け目ほどに狭くなっていた。

帰りには、生まれて初めてケルン大聖堂を見た。この聖堂に献身すれば、精神が天上の高みにまで登るのではないかと感じた。この素晴らしい建築物が深刻な破壊を被ることなく重爆撃を耐え抜いたことは、何マイルも遠くから見えるその尖塔が聖なる古都ケルンに近づく旅行者を誰でも歓迎してくれることは、幸せなことである。

しかし、一分おきに列車が到着していた巨大な駅、日曜日の朝早くから多くの少年少女がリュックを背負いながら楽しそうに歌を歌っていた駅、ホールが光で満ちていたケルン駅は、戦争でひどく損害を受けた。

母も妹も満喫したラインの旅から帰ってきたすぐあとに、私は、結婚式に出席しなければならなくなった。ハールレムにいる友人のいとこが結婚するからである。そこでは結婚式にたくさんの行事があり、友人はさまざまなパーティーに私に出席してもらいたがったからである。花嫁は、ドルトで、市の端にある庭の大きい家に住んでおり、花婿の両親は、ロッテルダムに住んでいた。

ドルトは結婚式を挙げるにはとくにふさわしい場所である。なんといっても、輝く青空のもと、夏の日を水上で楽しく過ごせるからである。花婿の両親は、大きな船上パーティーを開いた。私たちは、広い水路をムールダイクまで行き、帰りにレーベシュタイン城を見学した。別の日には、一団の船乗りたちがある島まで船を漕いで連れて行ってくれ、私たちはその古い農園でピクニックを楽しんだ。あふれるような楽しさに誘い込むために、水中では自作の喜劇が仕込まれていた。それは大成功だったので、灰色がかった黄色いひげをはやしたネプチューンが登場する続編を、私たちが即興で作ったほどである。

すごく感動したのは、私がある晩にゲルマン神話の女神フェレダの仮装をして、結婚の祝辞を述べ、自作の詩で彼女たちの将来の生活を予言したときである。私は、庭で、月明かりの下で話を始めたが、そのとき、古代の予言者の霊が本当に私に乗り移ったかのように思った。

私は、花嫁の家族のひとりと一緒に泊まっていた。彼女は、若いのに寡婦でロマンチックな性格をしていた。彼女はある医者に誘惑されているそうで、どうしたらよいのか私に教えて欲しいとやってきた。私は、それを非常に大事に考えた。私たちは付き合った方がよいのかよくないのかと長々と話をし、私もこの件にかなり夢中になった。もちろん、彼女は彼と付き合った。

さて、ドルトの家は都市貴族の館で、それは堂々としたものであった。家族ひとりひとりに個室があり、年代物の家具も、趣味がよく堅牢であった。壁には、18世紀からの家族の肖像画が掛けられていた。醜くて凡庸でなければいい前世紀中葉の生活様式は、この田舎の不屈の都市貴族にはいかなる影響も与えてはいなかった。

ドルトでの一週間の思い返すとき、そのばかばかしさ、悪ふざけ、婚約する者まででたのぼせあがりにもかかわらず、それぞれの若い男女が、その生涯で一度、楽しい結婚式の喜びを心おきなく体験できたということだけはいえる。

そして、私は、19歳から21歳までのあいだ陥っていた浮ついた生活のあり方を、幸運にもここで清算した。すぐに、私の感情と思想、苦悩と喜び、熱望と期待に、詩という魔法の杖によって美を創造したいという大きな変化が起こった。

ライクで過ごした冬にも、時折、詩が頭に浮かんできた。きっかけは、あの若いオペラ歌手にフランス語でお別れの手紙を書き、それをこっそりと投函したことである。「あなたがいつ帰ってきてても、私が最高のキャラバン・サライ」と手紙を結んだ。その時から、時々詩が思い浮かぶようになったのである。みんなから敬愛されていたキューネン⁹教授が亡くなったとき、その死を追悼して二編のソネットを捧げたことも覚えている。そこには、自分自身のオリジナルなイメージも方向も語られていず、自分自身の声もなかった。

その数年のあいだに、かつての勉学意欲がふたたび目覚めてきた。ヴァン・デル・ヴルフ¹⁰教授が大学生以外のために開いていたコースに通って、法哲学を学んだ。まもなく80年代の人々の運動にも関心を持つようになつた。それ以前から、ヴァン・エーデン¹¹の『エレン。苦悩の歌』と『研究』の一部を、フローニンゲンの友人と一緒に読んでいた。今度は、アルベルト・ヴェルウェイ¹²の『詩集』を手に入れ、感激しながら読んだ。

⁹ レイデン大学の神学教授で、旧約学が専門であったアブラハム・キューネンのこと。歴史的・批判的な旧約テキスト解釈の先駆者のひとり。

¹⁰ ヴァン・デル・ヴルフは長くレイデン大学教授を務めた人物。専門は法哲学であったが、政治的な関心も強く、フィンランドのロシア帝国からの独立運動に関わった。旧自由主義から社会的自由主義の方に立場を移すなかで社会問題にも関心を深め、前述の『道案内』に「トインビーの仕事」という論説を発表して「レイデン民衆の家」の設立を主導した。1899年に設立されたこの施設は、レイデンとその周辺の労働者階級に対して社会文化活動の場を提供するもので、現在も存在する。

¹¹ ヴァン・エーデンは、80年代の人々と呼ばれる文学運動の創設者のひとりで、運動の機関誌『新道案内』の創設者にして編集者。

¹² ヴェルウェイも80年代の人々のひとり。建築家のベルラーへとともに、総合芸術を志向した。

アルベルト・ヴェルウェイは『新道案内』の編集部と衝突してから、80年代の人々の運動から抜け、キティー・ヴァン・ヴロッテン¹³と結婚して、ヴィラ・ノヴァに住んでいた。家は、ノールドウェイク・ビンネンとノールドウェイク・アーン・デ・ゼーのあいだにある砂丘の麓にあった。この二人のような優れた人物が近くにいることが、すぐに判った。もう長いあいだ、私は、ヴァン・ヴロッテン家の娘たちが享受する自由をうらやんでいた。キティーは、父親が亡くなる前に、夏によくノールドウェイクに泊まりがけで来ていた。キティーと私は何度かおしゃべりをし、そのときにももちろん、アルベルト・ヴェルウェイと会いたくてたまらないと話した。

この願いはすぐにはかなえられた。キティーは、私が彼女の夫の作品に感動していると知っていたので、一度会いに来ないかという親切な手紙をすぐにくれた。私は有頂天になった。父は、「『新道案内』に巣くう若造」に対する保守的ブルジョアジーの偏見を抱いていたので、このつきあいを好ましくないと考えた。ヴェルウェイと知り合いになったとき、彼は26歳で、私より5歳年上であった。年齢はそう違わないのに、知的成熟の差は途方もなく大きかった。彼は、オランダ語で書かれたもっとも美しい詩を書くだけでなく、オランダ文学にも深い知識を持っていた。彼は、まもなく『ヴォンデル入門』を出版することになっていて、そこでは、このオランダ詩人の王と、文学好きなオランダ人の広い階層とを互いに近づけようと試みていた。こうしたことに、私はどう反応できるというのか？何もできないのが当然である。だから、はじめがくつろいだものにならなかったのも、当然であった。

しかし、こうした抵抗はすぐになくなった。ヴェルウェイは、親切で率直だった。彼は、秘書として、私はホラント州の工場経営者の秘書だったと思うが、アメリカに旅行したときの話をしてくれた。もちろん私たちは、相手を敬称で、「ヴェルウェイさん」、「ファン・デル・スカークさん」と呼び合った。しかしキティーは、子どもの頃から自由な環境で育ったので、彼が私を尊称で呼ぶと、「アルベルトったら」と笑った。そして詩人は、私とお別れの握手をするときには、「じゃあいエット、また来いよ」と普通に話してくれた。

今日では、独身の若い男女がお互いをファーストネームで呼び合うのは、世界中で普通のことになっているので、当時の習慣がそうでないということを想像するのは難しいかもしれない。が、父は、私がヴェルウェイをファーストネームで呼ぶのを好ましいとは考えないことは、私には判っていた。そこで、家に帰る途中、どうしたらよいのかと考え続けた。例えば、私と父が散歩しているときに、たまたまヴェルウェイ夫妻と出会ったとする。父は、この詩人が私をファーストネームで呼ぶのを聞くだろう。そうすると父は激怒して、つきあいを禁じるだろう。等々。

しかし、私はどんな犠牲も払いたくなかった。とうとう私は、ヴェルウェイ夫妻に、事情を拝察された上で、これからも付き合っていただきたいという希望を述べた手紙を書くことに決めた。

¹³ キティーの姉妹のヴァルタはヴァン・エーデンと、ベッツィーは画家で写真家のウィルヘルム・ウィッツェンと結婚した。ウィッツェンも、80年代の人々のひとりである。

私は恥ずかしかったし、情けなかった。しかし、父に向かって「パパ、私はもう 21 歳のだから、たんなる形式に過ぎないことであなたの考えに合わせる必要はないわ」と、いえる勇気はなかった。まだ自立していなかったのだ！

もちろんヴェルウェイ夫妻は私を笑い飛ばしたが、私は夫妻が私を愚かな生き物だと考えたに違いないと思い、そのことでずいぶんと心を痛めた。のちに私は、この心痛を感じてよかったと思うようになった。というのも、私の人生では、こうした心痛が、より深い喜びへと通じていったからである。

日常的な事物の印象を美へと昇華させたいという強い熱望は、どのようにして生じたのだろうか？それはもう判らないが、しかし、そうした熱望がしだいに大きくなり、私のすべてがそれで一杯になってしまったのは、事実である。昼は不安に満ち、夜は焦がれる夢に満ちていた。世界が真っ白になった。三流の画家との偶然の出会いによって、こうした同様に陥ったのだが、いとこのひとりが注意した方がよいと考えて、「気をつけなさい。あの男はひそかに婚約している。」と警告してくれた。

私には、芸術家はすべて半神であり、私自身もその世界の住人になりたいと思っていた。しかし、その道は見えなかった。そんな時にある芸術家が、突然私に明確な啓示を与えた。

カトウェイクにいる父の同僚が、ヤン・トーロップ¹⁴のところいったときの話を父にしたのだ。トーロップがイギリス人の妻と小さな娘と一緒にカトウェイクに引っ越してくる、少し前のことであった。父の同僚の公証人は、画家のアトリエにいて、その作品について感激しながら話をしたということだった。自分でも絵を描く父が、私は学校時代の友人のところに泊まりにいくことになっていたが、私たちもトーロップの作品をみようか、と訊いてきた。トーロップは、容易に近づきたいひとかと思っていたが、実際には正反対で、訪問者を喜んで迎え入れてくれた。

二三日あとに、父と昼間、カトウェイクに出かけたとき、私の心臓は、うれしくてどきどきした。しかし、ひとたびアトリエに入ると、私は、芸術家のそばにいるというだけで圧倒され、最初は言葉が出なかった。

トーロップは、当時、さまざまな作品に取りかかっていた。私たちは、沢山の馬が海岸でボムボートを押し、その上に不思議な青緑色の海が小さく描かれているという、素晴らしく有名なボムボートの絵を見た。私はそれまで近代絵画を見たことはなかったので、この絵は忘れがたい印象を私に与えた。

しかし、私がひとりで向かい合った別の作品もあった。それは、おまるに座ったひとりの子ども、こちらに向かって腕を激しく伸ばしている異様な相貌の目の光りが強い男、そして絵を見るものには判らない何か別のものが、描かれたものであった。そして、このよくわからないものこそ、明らかに、画家自身がもっとも表現したいものであった。その時、トーロップが、柔らかな美しい抑揚の声で、彼の象徴主義に対する信条を説明してくれた。インド哲学、仏教、その他の事柄も、それに関わっていた。彼の話の聞いているのは楽しかった。空想とは関係のない世界、だが同時に「気づき」を得ることのできる世界が存在

¹⁴ トーロップはインドネシア生まれのオランダ人画家。妻のアーニー・ホールとイギリスに滞在しているあいだに、モリスの影響を受ける。カトウェイクに住んだ頃の作風は象徴主義。のちにカトリックに改宗する。

するのだという感情が、与えられるのである。より高い世界を私の目から隠してきたベールのはしが、すこしめくれた。

自然主義や印象派の絵画をとくに好んでいた友人は、近代絵画とハーグの印象派について語る食事の場に大いに満足し、そうした場をしつらえてくれた私の父に、心から感謝していた。

しかし、私はそれには参加しなかった。私を引っかき回し、興奮させていたのは、美しい夢の世界がとうとう私の前に開かれたということだった。詩の爆発が、生じた。数日のうちに一連のソネットが生まれた。それは、この時までには私が作った最上の作品であった。私はそれをトーロップに捧げるためにそれを送り、緊張しながら彼がどう反応するかを待っていた。

長く待つ必要はなかった。翌日にはトーロップが、礼を言いに来た。彼は、私の詩に好感を持ったように見えたが、そんなことに意味はなかった。彼はそんなことで批判的な感性を絶対に鈍らせないし、強力な直感に逆らって判断することもなかった。彼から強い魅力が発していた。ピロードのような目を備えた、ひとの気を引く頭、官能的な唇、普通のオランダ人とは違う - 彼には、オランダとノルウェーの他に東インド人と黒人の血も合わさっていた - 滑らかな身振り、こうしたものすべてが、彼の魅力を支えていた。

会話の途中でトーロップは、その詩をヴェルウェイに読んでもらったかと尋ねた。私が否定したところ、彼は非常に驚いて、ソネットを彼に見せに行こうといった。詩人と画家は、よく会っていた。砂地の小道を通れば、砂丘からノールドウェイク・ビンネンまで、小一時間で行けたのである。すごく喜んで、私は、その提案に同意した。いつ訪ねてよいのかとヴェルウェイから連絡が来るのを待っているあいだに、私には相反する感情が渦巻いていた。心のもっとも奥にある感情は、詩人に理解されず誤解されたらどうしようという心の痛みである。私の本質を彼の前に示すのに失敗するのではという心配である。これは、私のソネットの第二作であるソネットの花束の着想を生んだので、それをもちろん私は、彼に捧げた。

が、それは先の話で、ここで、こうした不安から頭をよぎるのは、決まって、このような光景である。私が大声で「馬鹿にするな、おまえが私を見くびるのは、おまえが私を理解できないからだ。」と叫ぶと、相手が「私はひとを馬鹿にしないよ。私は、あなたたち大衆を信頼して…」と答える、といった光景である。

情熱的な調子の返事が来た。激しい熱情に耐えきれずに、あちらこちらで、私自身の本質である私固有の言葉からなにかがあふれ出ていた。ヴェルウェイが決めた日に、どんなに緊張して、なんとかヴィラ・ノヴァにたどり着けたか、読者も想像できるだろう。

ヴェルウェイ自身が、私を迎えてくれた。「こんにちはイエット。今日は、二階にいておしゃべりしよう。」

私たちは、彼の書斎に向かった。その書斎で、彼は、砂丘や色とりどりの花が咲く球根畑や緑の牧草地が広がり、その向こうには尖塔が見えるという美しい光景を眺めながら、詩を作っているのである。ヴェルウェイは、デスクのところに座り、その向かいの椅子に座るようすすめた。

「新しい詩を作ったのですが、朗読してもよいですか？」と私がいうと、

「いいよ、でも座らないの？」と訊いてきたので、

「はい、たっている方が好きです」と、私は答えて、立ったまま詩を朗読した。

私は、一気に、一連のソネットをヴェルウェイに読んで聴かせた。私の声は、最初は震えていたが、しだいに滑らかになり、そのうちに、自分の本質をついに明らかにできたという幸せのなかで、詩を朗読していることさえ忘れた。

朗読を終えると、ヴェルウェイはしばらく黙っていた。それから、「いまは言葉にならないが、でもいいたいことはいろいろとある。一度、書いたものを見せてくれないか」といった。

彼は、ソネットを読み、それから、私の詩のどこがよくてどこがよくないのかを、そして、なぜそうなのかを、明解に事実即して説明し始めた。「ほら、ここのイメージはかわいい。それは、君自身から自ずと生じたイメージだ。でも、ここは付け足しであり意味がない。たしかに同韻語は必要だが、それは、君自身が必要だとあらためて気づいたときに、必要になるということだ。また詩を作るのなら、個々のことばが君の感情を正確に表現しているかどうかを、頭に入れて置かなければだめだ。」

彼は、それから話し続け、私は、息を詰めてそれを聞いていた。

「では、下に行こう。キティーがお茶を用意しているはずだ。」

彼は一階で、「イエットに美味しいコーヒーをもってきて。イエットが、一生懸命にがんばって、美しい詩を作ったんだ。」と、キティーに声をかけた。私は天にも昇る心地がした。それ以来、私は、折に触れてヴェルウェイ家を訪れ、新しい作品を読んでもらった。たまには、ヴェルウェイが私を散歩に誘うこともあったが、そのときの話題は、もっぱら詩についてであった。もともと、会話といってもヴェルウェイが話し、私が聞いているというものだったが。ヴェルウェイは、根っからの教師だったのである。

私は、「キリストのソネット」の作者に比べて、また、その作家仲間と比べても自分がいかに未熟で経験にも乏しいかはよく判っていたが、同時に彼の男性としての優秀さも自覚していた。ヴェルウェイは、小ブルジョアの出身で、父親は大工であった。子どもの頃に父親が亡くなってから、彼は、義母と家族を支えていたのである。

彼の近くにいと、自分が、どうといった体験もしていない素朴で無知な村娘のように感じた。私は、それほど本を読んでこなかったし、美と真理へのあいまいだが心からの衝動を導いてくれるひとともつきあったことがなかったからである。だから、私がヴェルウェイを尊敬したのも、当然のことであった。彼は、本来、教え魔であり、後には教授にもなったほどである。私の前で彼が話す言葉や彼のたたずまいは、師匠のようであり、父親のようであり、保護者のようでもあった。彼の助言を受けて、私は、早すぎる段階で詩集を出版しないようにしようとか、『新道案内』の運動を完全な崩壊に導いた厄介事に引きずられないようにしようといったことを、考えなければならなかった。この厄介事は、私にも関係があったにしろ、事情が込み入っていて、どうしたらよいのか見当もつかないものだった。彼のおかげで、埋もれていた私の詩才は成熟した。「途中のものを出版するな」という助言は、私も若い詩人に与えている。

こういったことすべての陰の部分の部分が明らかになったのは、後のことであった。ヴェルウェイは、彼が私を手放さなければならない瞬間が訪れるということを、まったく考えていなかった。それはおそらく、彼の評価の仕方そのものからして、避けがたかったことであった。

さて、私の生活は一変した。私は毎日、熱心に、新しい詩を作ったり、ヴェルウェイの助言にしたがってオランダ詩の古典を、まずフォンデルやホーフトについて研究したりして過ごした。両親も認めたように、私は以前よりも、快活だが冷静になり、健康にもなった。そこで両親も、私が自分にあつた道に行き当たったこと、それがヴェルウェイの助言のおかげであることが判った。私の詩人との付き合いを、邪魔することもなくなった。私は、『新道案内』の運動の指導者のひとりが私の作品を高く評価したことを、父も内心では少しは自慢していたのではないかと、思っている。（続）